

## 家族間での心血管疾患とうつ病の関連を明らかに -配偶者の心血管疾患により個人のうつ病リスクが増加-

### 概要

ボストン大学公衆衛生大学院の古村俊昌 修士課程学生と京都大学大学院医学系研究科の井上浩輔 准教授、近藤尚己 教授（社会疫学）とカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）の津川友介 准教授（医療政策学）らの研究グループは、全国健康保険協会（協会けんぽ）の生活習慣病予防健診および医療レセプトのデータ（約 28 万人）を用いて、配偶者の心血管疾患（CVD）によって本人のうつ病リスクが上昇することを明らかにしました。

これまでの研究により、個人レベルでは CVD とうつ病には様々な関連が存在することが報告されてきました。一方で、個人の CVD がその家族のメンタルヘルスにどの程度影響しているかは明確な検証がされていませんでした。本研究では、全国健康保険協会（協会けんぽ）に加入する世帯主（被保険者）とその被扶養者を対象とし、被扶養者の CVD 発症（脳卒中、心不全、心筋梗塞）の有無における世帯主のうつ病リスクの変化を比較しました。その結果、被扶養者が CVD を発症した家庭では、そうでない（被扶養者が CVD を発症していない）家庭に比べて、世帯主のうつ病リスクがより高く認められました。また、被扶養者の発症した CVD がより重症である場合、世帯主のうつ病リスクがより高くなることが示されました。

本研究結果は、配偶者が CVD を発症した際に、そのパートナーに対してメンタルケアを提供する重要性を示唆しています。予防医療が注目を浴びる近年において、患者本人に加えて患者の家族を意識したケアを提供することは重要な視点となる可能性があります。このような家族単位での健康に着目した研究は世界的に見ても限られているため、更なる知見の創出と効果的な施策の開発が求められます。

本研究成果は、国際学術誌「*JAMA Network Open*」（オンライン）に、4月13日（土）午前0時（日本時間）に公開されました。

※図は最終頁を参照ください。

## 1. 背景

日本におけるうつ病の発症者数は増加傾向にあり、うつ病患者の数は100万人以上に上ると報告されています。うつ病は健康や幸福度および労働の生産性に大きな影響を与えていることから、その規定因子を明らかにすることは喫緊の課題です。過去の研究では、個人レベルでは心血管疾患(CVD)とうつ病に様々な繋がりがあることは多く報告されてきました。その一方で、配偶者のCVDがパートナーのメンタルヘルスへ与える影響に関するエビデンスは限られています。そのため本研究では、配偶者のCVD発症とそのパートナーのうつ病の関連性を明らかにすることを目的としました。

## 2. 研究手法・成果

日本における最大の保険者である全国健康保険協会のデータを用いて、277,142組の20歳以上の夫婦のペア(平均年齢58.15)を作成しました。2016年度から2021年度における最大6年間の追跡の結果、配偶者(被扶養者)がCVD(脳卒中, 心不全, 心筋梗塞)を発症した夫婦では、配偶者がCVDを発症していない場合と比較して、世帯主(被保険者)がうつ病を発症するリスクが13%高いことがわかりました(調整ハザード比[95%信頼区間]=1.13 [1.07-1.20])。この関連は性別や年齢などの属性による違いは認められず、配偶者の発症したCVDが入院を要するような重症なケースではより強い関連が認められました(調整ハザード比[95%信頼区間]=1.23 [1.10-1.38])。

## 3. 波及効果、今後の予定

CVD患者の家族に対する包括的なメンタルケアを提供することはうつ病の発症の予防に繋がる可能性が示唆されました。予防医療が注目を浴びる近年において、患者本人に加えて患者の家族を意識したケアを提供することは重要な視点となる可能性があります。しかしながら、このような家族単位での健康に着目した研究は世界的に見ても限られているため、更なる知見の創出と効果的な施策の開発が求められます。

## 4. 研究プロジェクトについて

本研究は全国健康保険協会の「外部有識者を活用した委託研究事業」、国立研究開発法人 科学技術振興機構(JST)による戦略的想像研究推進事業「さきがけ」の協力を得て行われました。

### <用語解説>

**心血管疾患(CVD)**: 心臓や血管の機能異常によって引き起こされる病気の総称であり、心筋梗塞や脳梗塞などの病気が含まれる。CVD, cardiovascular disease.

### <研究者のコメント>

本研究は古村(筆頭著者)が社会疫学を学ぶ中で、多くの研究が個人のみを対象としており、家族や世帯全体に着目した研究が少ないことに気付いた所から始まりました。日々の習慣から社会的な要因まで、私達の健康を規定する因子は様々な規模で存在しています。その中で、家族とは生活に直接関わる身近な存在でありながら、実際どのように私達の健康に影響を与えているのかのエビデンスは多くありません。そして患者本人だけではなく、その周りの家族に対してもケアを提供する

事は、予防医療が注目を浴びる近年において重要な視点である可能性があります。世帯全体を対象とした研究は世界的に見ても限られているため、より効果的な施策の開発に繋がる知見の創出に注力していきたいと思えます。

### <論文タイトルと著者>

タイトル : Depression Onset After a Spouse's Cardiovascular Event (配偶者の CVD 発症後のうつ病)

著者 : Toshiaki Komura<sup>1</sup>, Yusuke Tsugawa<sup>2,3</sup>, Naoki Kondo<sup>4</sup>, Kosuke Inoue<sup>4,5</sup>

1.Department of Epidemiology, School of Public Health, Boston University, Boston, MA, USA

2.Division of General Internal Medicine and Health Services Research, David Geffen School of Medicine at UCLA, Los Angeles, CA

3.Department of Health Policy and Management, UCLA Fielding School of Public Health, Los Angeles, CA

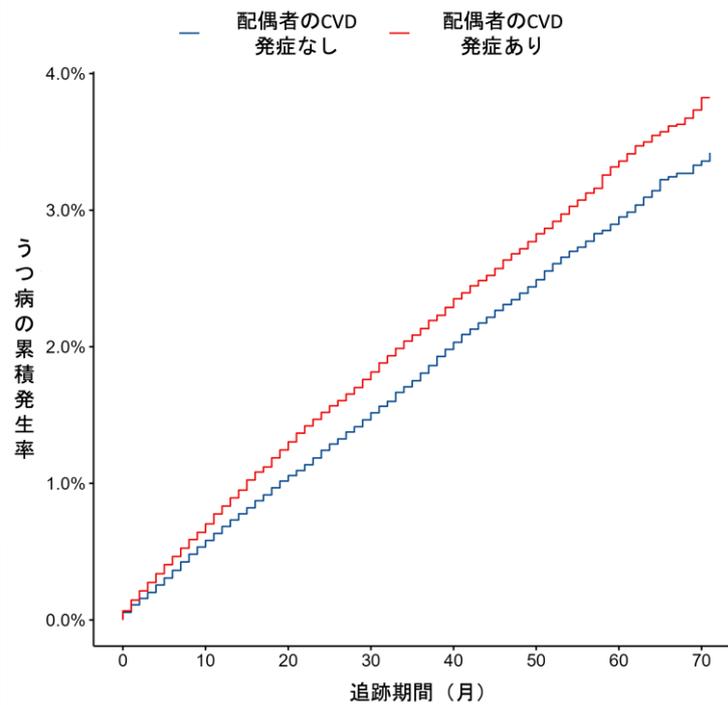
4.Department of Social Epidemiology, Graduate School of Medicine, Kyoto University, Kyoto, Japan

5.Hakubi Center for Advanced Research, Kyoto University, Japan

責任著者 : 井上浩輔

掲載誌 : JAMA Network Open DOI : 10.1001/jamanetworkopen.2024.4602

< 参考図表 >



最大6年間の追跡の結果、配偶者がCVDを発症しなかった世帯に比べて、配偶者がCVDを発症した世帯では、世帯主がうつ病を発症するリスクが13%高かった。